

認知的側面からアプローチする道徳の授業づくり

— 「いのち」を大切にすることを育む授業の実践—

教育実践高度化専攻
小学校教員養成特別コース
P10073G 中田祐輔

1 研究報告書の構成

- 序章 問題の所在と研究の目的
- 第1章 道徳教育における「いのち」の授業
 - 第1節 道徳教育の概要
 - 第2節 道徳教育における「いのち」に関する指導の現状
 - 第3節 実践上の課題と改善の視点
- 第2章 先行研究の分析
 - 第1節 道徳の時間における認知的側面を重視した指導法の有効性
 - 第2節 生命観から「いのち」について認識させる道徳の授業
 - 第3節 道徳的実践力と道徳的判断および認知の関係
- 第3章 授業実践の構想
 - 第1節 仮説と授業モデルの構想
 - 第2節 事前調査と分析
 - 第3節 授業実践の方法とその対象
- 第4章 検証授業の結果・分析および考察
 - 第1節 検証授業の結果
 - 第2節 分析と考察
- 終章 まとめと今後の課題
 - 第1節 研究の成果
 - 第2節 今後の課題

2 研究の概要

(1) 問題の所在と研究の目的

今日の教育現場において、いじめや不登校、学級崩壊、校内暴力や少年犯罪など様々な問題が児童をとりまいていいる。また、核家族化や少子化で、人の死や誕生に関わる経験が少なく、テレビやゲームなどで死んでも生き返るなど、現実的に生や死など「いのち」を意識していない。

これまでの命に関する道徳の授業は、十分な実感を伴わないため、児童の「いのち」を大切にするという意識があまり定着しておらず、頭では分かっているが行動に移せない児童も少なくないと思われる。

京江光之の実践では認知的側面からアプローチを重視した道徳の授業が道徳的判断力を向上させる上で有効である可能性が示唆されている¹⁾。また、高村恒子らの実践では、「いのち」について多面的に7つの観点からせまることにより、児童の「いのち」への認識が深まり、児童は自分と他の生命との深い関わりを知ることを通して、より深く、「いのち」の大切さを実感できたと示されている²⁾。今栄国晴の道徳的行為成立の過程に関するモデルの検討では、道徳的行為の生起について、認知過程が重要な役割を担っていることがうかがえる³⁾。したがって、道徳の授業において、認知的側面を重視した授業は「いのち」の大切さを育むために有効な指導法だと考えられる。

本研究では、『いのち』がどのようなものなのか認知することにより、『いのち』への認識が深まり、その結果『いのち』を大切にすることを育むことができる」と仮説をたて、授業によって検証し、認知的側面からアプローチする道徳の授業の有効性を明らかにすることを目的とした。

(2) 対象と方法

【対象】

兵庫県I市立I小学校

第2学年児童34名（男子18名、女子16名）

【方法】

道徳の授業として、「いのち」の授業を1.「うまれる」2.「死ぬ」3.「生きるしあわせ」4.「よく生きる」の4つのテーマに分け、それぞれ1単位時間ずつ、計4単位時間で構成した。

「いのち」を認知的側面から働きかけるために、「いのち」を理解する観点として、高村ら（2007）らの考えを

基に、「死」の観点も含め、17 観点に分け、これらの観点から子どもたちに「いのち」についての認識を深めることとした。児童に与える新しい知識として、テーマ①では、「生まれる」ということについて、「受精の仕組み」・「確率」・「血縁的なつながり」を伝えた。テーマ②では、「死ぬ」ということについて、「だれでも」・「生き返らない」・「動かない」・「避けられない」・「予想できない」という「死」に関しての知識を伝えた。テーマ③では「生きるしあわせ」ということについて、「自分のしあわせ」・「他人のしあわせ」など自覚させながら、「様々な幸せがあること」・「生きているから幸せを感じることを伝えた。テーマ④では、「よく生きるとは」ということについて、「アンパンマンの作者であるやなせたかしさんの思い」を伝え、自分なりの「生き方」について考えさせた。また、授業方法としては、児童に新たな知識を与える教材を自作し、知識を伝えることに重点を置いた認知的側面から働きかける指導法で授業を行った。

3 研究成果

本研究では、『いのち』がどういうものなのか認知することにより、『いのち』への認識が深まり、その結果『いのち』を大切にすることを育てることができる」という仮説のもと、認知的側面からアプローチをする道徳の授業づくりを目的として、道徳の授業を構成し実践した。

「いのち」を認識する際、「いのち」をとらえる観点として、17 観点に分け、その観点から「いのち」に迫ることによって、児童の「いのち」の大切さをとらえる視点が多面的になり、より「いのち」対しての視点を持つことができた。

「いのち」について、「生まれる」「死ぬ」「生きるしあわせ」「よく生きる」の4つのテーマに分け、認知的側面からの指導として、各時間テーマに関する新しい知識を伝えたことは、とても意義深いものであった。特に「死」に関してだが、実施した学年が低学年ということもあり、まだはっきりと認識出来ていない児童や「死」に関しての経験が少ない児童もおり、「死」についてクラスで考えるこ

とができたことは、「いのち」を多面的に理解・実感するためには、児童にとって、有益な体験であったと感じる。

4 今後の課題

今後の課題としては、以下のことが挙げられる。

①他の教科等との関連、学年間も考えた指導計画の必要性

「いのち」を大切にすることは、道徳の時間のみで育まれるわけではない。すべての教科と関連づけ、さらには児童の認知発達についても学年で異なるため、それらを包括的に考慮し、年間を通して、継続的な指導が望まれる。

②認知的側面以外の指導法の検討

本研究では「認知的側面」を重視した指導法で行ったが、その他の指導法は行っていない。そのため、別の指導法と比較し、さらなる検討を行って行くべきである。特に低学年においては、理解するよりも体で実感できるような生活体験と結びつけた授業の方が有効であるかもしれない。

③観点が適切であったか、「いのち」を大切にすることを本当に育ったか。

観点から「いのち」に迫ることによって、児童の「いのち」に対する認識が深まったのは確かだが、「いのち」を大切にすることを実際に育てているかは、児童の発言や記述の内容からは判断しにくい。したがって、その点については、再度、探求していきたい。

【引用・参考文献】

- 1) 京江光之「中学校における道徳の時間の指導法に関する実証的研究」兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 学位論文、2005年。
- 2) 高村恒子ほか『『いのち』を多面的・実感的にとらえる道徳教育をめざして』『川崎市総合教育センター研究紀要19号』、2007年、pp.97-112。
- 3) 今栄国晴「道徳的行為成立過程に関するモデル検討」『愛知大学研究報告 教育科学編36』、1987年、pp.85-95。